

人口の減少と 学会活力の維持について

総務理事 中野博隆



学会の運営に携わる機会を頂き約1年になる。この間に学会を含む研究と教育の現場で起っている諸課題について触れた。ここでは、現状を踏まえて、幾つかの課題に対してベストを尽くすにはどうしたらよいのか考えてみたい。

第1の課題は、電子情報通信分野からの学生離れ、学会収入の減少である。学会加入者数が減少傾向にあること自体は、日本の人口が純減になり、経済規模の縮小の影響が隔々まで及んでいる中では仕方ないことかもしれない。むしろ、学会の規模が拡大しているときには顕在化しなかった問題に目を向ける必要がある。例えば、拡大時にはその一環として新しい施策、研究分野の立上げ等ができたが、縮小時にはこのようなメカニズムは期待できない。縮小時には、新しいことを行うための資源を確保するため不要なものを捨てていかねばならないが、これが新しいものを作るよりも難しいことが多い。この点に関しては、多くの努力を今後も継続していきたい。なお、既存の組織から新しい施策等が生まれる場合もあり、組織論は本質的な問題ではないかもしれない。

第2の課題は、ものごとの基本原理の理解よりも、アプリケーションをいかに使いこなすかに人々の関心が移っていることである。これは電子情報通信分野からの学生離れの一因となっているのではないか。現在では、実に多様なサービスやソフトが供給されている。基本原理の理解がなくても、これらを使いこなすことができれば大部分の場合、不自由しない。このため、電子情報通信分野を専門としなくてもよいと考えている人々が増えているのではないか。これは、電子情報通信分野の成果の利用者のすそ野を広げるという意味で全体にとっては良いことである。この際に問題となるのは、ものごと実現の可否判断がサービスやソフトがあるかないかによってなされてしまうことであり、基本原理に従って判断されなくなることである。また、基本原理にさかのぼって新たなものを作ろうとすることがおろそかになる。教育現場では基本原理をどこまで追求させるべきか悩ましい課題となる。学会や教育現場から基本原理理解の必要性をより強く訴えていくこととしたい。

第3の課題は、電子情報通信分野が成熟してきたことである。今の学生より前の世代は、常に新しい技術、サービスの中にいた。例えば、コンピュータと通信技術がもたらす新しい世界に日々驚きを感じた。追いつくのが大変であったが、コンピュータと通信の発展の歴史（技術）を体験として順番にたどることができた。最初からすべてが整っている世界で、昔感じた驚きを伝えることは易しいことではないが、やりがいのある役割である。資料に残すことだけではなく、新しいことにチャレンジすることのつらさや楽しさを伝えていきたい。

もちろん、いろいろな分野で革新が継続するし、そこに人々が集まるのは当然である。しかし、電子情報通信の領域は世の中の多くのサービスに関連する基礎的な領域である。この分野により多くの頭脳が集まりその先端を切り開くことは重要である。多くの革新がこの分野でも継続するはずである。原理や基本をおろそかにすることなく革新をリードする元気な集団が育つように微力を尽くしたいと考えている。